

# 安養寺跡を探る

— 安養寺跡発掘調査概要 —



第2次発掘調査 航空写真



明和町

## はじめに

明和町の文化財と聞かれますと、全国的に知られています国指定史跡「斎宮跡」の名前が出てきますが、町内には数多くの貴重な文化財が存在しております。

本書で紹介いたします大字上野地内に所在する「安養寺跡」は、町民にあまり知られていませんが、本町にとって斎宮跡に匹敵するほどの価値のある文化財です。

安養寺は、京東東福寺第9世を務めたちんごうだいご頼久大恵が鎌倉時代の永仁5年(1297)に開山し、その後、北畠氏に手厚く保護され、室町幕府からも守られていたほどの寺でした。そして、天正年間、織田信長軍に攻められ焼失したと伝えられています。安養寺は、その後、伊勢街道沿いに再建され現在に至っておりますが、創建当時の跡地には、昭和19年に陸軍病院が建てられ、国立療養所明星病院などを経て、現在、済生会明和病院となっております。

病院の施設整備に伴い、平成11年度から平成26年度までに7回にわたって発掘調査がなされ、徐々に安養寺の様子が明らかになってまいりました。

本書は、今までの発掘調査の成果を紹介するもので、全容解明にはまだまだ時間がかかりますが、少しでも安養寺の歴史について知っていただく一助になれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にあたり、ご理解とご協力いただきました社会福祉法人恩賜財団済生会明和病院をはじめ、地元のみならず、本書刊行にご協力いただきました関係者の方々に対して厚くお礼申し上げます。

平成28年3月31日

三重県多気郡明和町  
町長 中井幸充

## 目次

### <探る編>

安養寺とは—南勢屈指の大寺院—	1
遺構から探る—百間四方の大伽藍—	2
遺物・史料から探る—安養寺の威容を語る品々—	6
造営作業から探る—寺を造った人たち—	10
守りつづけられた安養寺の文化財	12

### <資料編>

発掘調査の流れ	16
安養寺跡発掘調査(第1次～第7次)の位置概略図	17
第1次調査	18
第2次調査	19
第3次調査A・B地区	20
第4次調査	21
第5次調査	22
第6次調査	24
第7次調査	26

### <参考文献>

- 明和町史編纂委員会 1972年『明和町史 明和町』  
明和町史編さん委員会 2006年『明和町史 史料編 第二巻』明和町  
三重県 2005年『三重県史 資料編 中世2』三重県  
三重県 2014年『三重県史 別編 美術工芸』三重県  
森田利吉 1960年『大日本國勢州多気郡上野御堂安養寺記』森田利吉  
三重県埋蔵文化財センター 2006年『北畠氏とその時代』三重県埋蔵文化財センター

# 安養寺とは —南勢屈指の大寺院—

安養寺は、中世に南伊勢で屈指の規模を誇った大寺院で、京都五山の一つ臨濟宗東福寺に属し、鎌倉時代の永仁5年(1297)に創建されました。室町時代には幕府や伊勢国司の北畠氏から手厚い保護を受け発展していましたが、天正4年(1576)、戦火で焼失したと伝えられています。その後、天正16年(1588)、伊勢街道が付け替えられた頃、現在の場所に移されたといわれています。

寺に伝わる古文書は、県指定文化財となっており、貞治5年(1366)の『某書下』では「安養寺を諸山に列する」とあり、室町幕府の保護がうかがえます。

伝承では「安養寺の境内地は百間四方あり、その周りに堀をめぐらした大伽藍」であったとされてきましたが、跡地にはなにも残っておらず、名刺とされながらも実際の規模や建物などはよくわかっていませんでした。しかし、済生会明和病院の改築などの工事に伴い、明和町が実施した7回の発掘調査の結果、古文書や地元の伝承ではわからなかった寺の全容が少しずつわかってきました。探る編では、調査の成果から安養寺の姿を探るとともに、出土資料などの文化財をご紹介します。



時代区分	主なできごと	安養寺のできごと・明和町のできごと	発掘成果
12世紀 中国 金	平家時代 1187年 榮西、入宋		
	南宋 1202年 京都建仁寺が開かれる		
13世紀 元	鎌倉時代 1255年 東福寺の伽藍が完成する	1264年 信子内親王、宮宮に群行 (最後の宮王群行)	「上野之内」鎌倉土器や香炉など安養寺に關わる遺蹟・遺物はあるものの創建時期の規模不明
	1274年 文永の役	1297年 頼運権律師、安養寺を創建し、 阿山に鹿凡大惠を招く	
	1281年 弘安の役	1312年 鹿凡大惠、安養寺で示寂(84歳)	
14世紀 南北朝	1333年 鎌倉幕府滅亡、後醍醐天皇による新政府開始	1333年 信子内親王、宮王に卜定される (最後の宮王)	
	1338年 足利尊氏、征夷大将軍に	1366年 安養寺、備山の列に入る	
15世紀 明	1341年 幕府が五山の序列を定める 第五に東福寺	1407年 北畠満彌、寺領安堵の御教書を発給	この頃、堀が造られる 「圃」と墨書された土器 圃山堂が存在か
	1386年 足利満彌、五山座をあらためる 五山之上に南禅寺、東福寺は西	1443年 北畠教員、御教書を発給 (折願所の文字が見られる)	
16世紀 朝鮮	1404年 勘合貿易始まる	1471年 北畠政房、寺領安堵の御教書を発給 (折願所の文字が見られる)	「東院堂」と墨書された土器 (「度院」=1520年) 瓦葺 この頃、屋根を修繕か
	1467年 応仁の乱	1493年 北畠村綱、磯城を攻め、安養寺を再所とする	
17世紀 徳川	1560年 桶狭間の戦い	1576年 北畠貞教自害、伊勢国司北畠氏実質的に滅亡、 口伝ではこの頃安養寺にも火災が及ぶ	鎌倉土坑 この頃、発掘を製作か
	1600年 関ヶ原の戦い	1588年 この頃伊勢街道沿いに安養寺も移転	

# 遺構から探る — 百間四方の大伽藍 —

安養寺跡は明和町上野地区にあり、標高はおよそ11m～12m、南から北へゆるやかに伸びる丘陵の先端の安定した場所に位置しています。周辺は丘陵にはさまれた谷状の地形を利用して田んぼになっています。現在の安養寺は伊勢神宮への参詣者が多く通った伊勢街道に面しています。寺には「日本三靈水」と呼ばれた井戸「明星水」があり、江戸時代には参詣の途中に立寄る多くの人で賑わったようです。



小字「寺屋敷」の範囲

## 安養寺の痕跡

安養寺跡は、現在済生会明和病院となっており、寺であった面影はありません。ただ、周辺の地名によってうかがい知ることができます。地名には、その土地の歴史を今に伝えてくれるものがたくさんあります。

左に示した地名が書かれた地図を見ると、「寺屋敷」という小字名があることがわかり、遺跡の範囲とほぼ重なり合います。

## 謎の絵図

下の絵図は郷土史家の森田利吉氏によるもので、『大日本国勢州多気郡上野御苗安養寺記』（昭和35年）としてまとめられています。右から「総門」「放生池」「三門」「仏殿」「法堂」「方丈」「開山堂」などの建物が描かれ、寺の周りを溝と築地塀が囲っていますが、これらの景観が実際のものであったかは不明です。



森田利吉「南勢の名刹安養寺の旧観」

## 巨大な堀

安養寺はどれほどの大きさだったのでしょうか。

発掘調査の成果から、注目すべきは大規模な堀です。

堀は幅約4m、深さ約2mもあり、城郭の堀のような大きさで容易に渡ることができないほどです。堀はこれまでの調査で15世紀ごろに作られたと推定され、寺を囲っていたことがわかってきました。堀に囲われた範囲は、南北約180m、東西約170mで、伊勢国司北畠氏の館が南北約200m、東西約110mであることと比べても非常に広大な範囲です。

この堀のラインと「寺屋敷」という小字と重ねてみると、ほぼ重なり合います。このことから、「寺屋敷」が安養寺の名残としてつけられた地名であると言えます。さらに、堀に囲われた範囲は伝承の「寺の境内地は百間(1間=およそ1.82m)四方あり、その周りに堀をめぐらした」に一致します。



第2次調査 堀発掘風景



小字「寺屋敷」の範囲(赤線)と堀推定ライン(緑線)



第1次調査



第2次調査

## 大胆推理、入口はどこに

堀で囲われた全盛期の安養寺の入り口は、どこにあったのでしょうか。

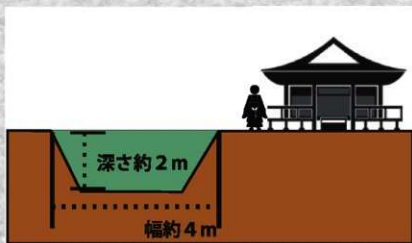
入り口を特定する上で重要な発見が、2014年度の調査で見つかりました。場所は堀の南辺ラインの中央部分です。寺院の入り口は南に面して作られることが多く、寺のセンターラインにあたる場所であることから、参道や三門の発見が期待されました。

調査の結果、堀の延長部分が見つかるとともに、堀が一部途切れ寺の内部と外部が地続きになっている箇所が発見されました。これは、寺の中心部への入り口となる陸橋リツキょうであると考えられます。陸橋は、幅およそ 2.5mほどの大きさでした。

今回見つかった陸橋は、寺のセンターライン付近であることから、重要な入り口であったと思われます。しかし、堀の規模に対してやや規模が小さく、門などの施設を発見できなかったことから、最も主要な入り口とは断定できません。



第7-4次調査 陸橋



堀模式図

## ～安養寺に戦い迫る!?～

堀からはたくさんおほくさうの土器が出土した他、甲冑の一部である小札こさずが出土しました。中世には寺院も武装しており、安養寺も例外ではなかったのでしょうか。

安養寺に関わる記録（『訳註真盛上人往生伝記』）には、北畠材親が礮城攻めの際に陣所をおいたことが書かれています。



小札 (左) : 表 (右) : 裏

新たな発見をもとに、安養寺の参道を推理してみましょ。う。

堀の特徴の一つは、小字「寺屋敷」の字界と堀のラインがほぼ重なることです。このことを踏まえて堀と字界を比べてみましょう。北側に堀よりも突出する部分が2ヶ所あることがわかります。その内1ヶ所は堀の北辺の中央付近です。今回見つけた陸橋が寺のセンターラインを意識していたことを考慮すれば、寺に関わる何らかの施設があったために字界も突出しているのかもしれない。また、安養寺跡の周辺をみると、古代伊勢道や近世伊勢街道といった主要な道路が寺の北側を通っています。

以上のことから、安養寺への最も主要な入り口は堀の北辺中央部分にあり、街道から寺への参道があった可能性があります。



小字「寺屋敷」地籍図



安養寺跡周辺航空写真（南から）

# 遺物・史料から探る —安養寺の威容を語る品々—

発掘調査の成果から、最盛期の安養寺の規模がわかってきました。それでは、安養寺にはどのような建物があったのでしょうか。『明和町史』では「塔頭に長福寺、宝篋庵、留春庵、湖春庵、南亭軒、禅興軒、多福軒、通玄庵、光照庵、善見庵等があった」としています。

安養寺と関わりの深い東福寺など京都五山の建物配置を参考にしてみましょう。京都五山とされる寺院には、「法堂」・「方丈」・「三門」などの施設が共通しています。このことから、安養寺にもこれらの施設があった可能性があります。

「法堂」とは住持が説法を行う場で、仏殿はなくても法堂は必要で寺内最重要の建物です。堂には仏像は安置されておらず、中央に住持の上がる演壇があり、その前に衆僧が説法を聞く広い空間があります。「方丈」とは住持の居室のことで、法堂よりも後方に位置して配置されています。

## 墨書土器から探る

出土資料から安養寺の建物に関わる手がかりは得られないでしょうか。

出土した土器には墨で字が書かれたものがあり、文字情報の限られる中では重要な手がかりです。

その一つに「開」と墨書された資料があります。墨書は天目茶碗の底に書かれており、15世紀頃の資料だと思われます。この「開」とは、「開山堂」を指すと思われる、安養寺に開山堂があった可能性があります。開山堂は塔頭の中でも重要な施設で、安養寺の場合、開山の靈元大愚の木彫が安置されていたかもしれません。

次に「愛染堂」と墨書された資料があります。土器には「庚辰」と年号も記されています。安養寺が存在した期間に庚辰の組み合わせは四回あり、1340年、1400年、1460年、1520年が該当します。土器の年代など総合的に見ると1520年の可能性が高く、16世紀前半に安養寺に「愛染堂」と呼ばれる建物があったことを示唆しています。



「開」墨書 天目茶碗



「山」線刻 天目茶碗  
※「山」は寺を指すと考えられます。



瓦質碗



水滴



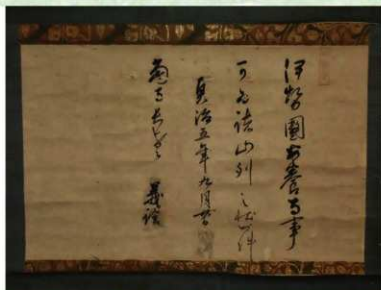
「愛染堂」墨書 香炉



## 有力勢力との深い関わり

三重県の指定文化財となっている古文書群は、安養寺の寺格を裏付ける重要な史料です。

貞治5年(1366)の『某書下』で「**精山**」の列に入れられたことや、『北畠政郷御教書案』で伊勢国司北畠氏から「**祈願所**」に位置づけられたことなど、安養寺が当時の有力な勢力と深い関係を持ち南勢の中で大きな存在であったことがわかります。



## 某書下

伊勢国安養寺事、  
可為諸山列之状如件

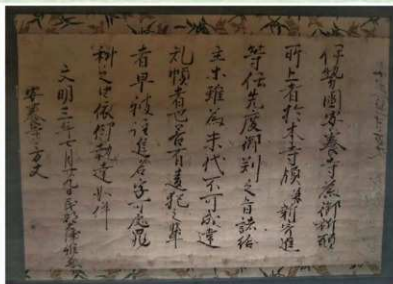
貞治五年九月廿日

当寺長老 ※(貼紙)「義詮」

※印箇所に捺消した跡と  
思われる墨痕がみられる。

貞治五年(1349)九月二十日付けの文書で、安養寺を「諸山列」とすることを伝えたものです。「義詮」とあることから、室町幕府二代将軍「足利義詮」(在位 1358-1367)によるものとされてきましたが、名前の部分は貼り紙で、日下差出部分に捺り消した痕跡があることから、発給者は不明です。

「諸山」とは、室町幕府が定めた「五山十刹」の下に位置する位で、全国で 200 ほどの寺が定められていました。癡兀大恵が住持であった東福寺は五山の一つでした。



## 北畠政郷御教書案

(端裏書)  
「安養寺方丈 民部大輔雅兼」

伊勢国安養寺為御祈願  
所上者 於本寺領并新寄進

等、任先度御判之旨、諸給

主等、雖為未代、不可成違

乱煩者也、若有違犯之輩

者、早被注進名字、可處罪

科之由、依仰執達如件

文明三年七月廿九日 民部大輔雅兼

安養寺方丈

文明三年(1471)七月二十九日付け、伊勢国司北畠政郷の御教書で、安養寺を「祈願所」として寺領および新寄進地を安堵するとあります。史料は案文ですが、安養寺と北畠氏との関係性の強さを表しています。

政郷の父で伊勢国司北畠教具の嘉吉三年(1443)八月九日付の御教書においても「当寺事為御祈願所」と書かれています。

## 出土品からみた安養寺内の様子

### - 瓦 -

寺院を代表する出土品に、瓦があげられます。安養寺からも鬼瓦や軒丸瓦、軒平瓦などさまざまな種類の瓦が出土しています。しかし、発掘調査で出土した瓦の量は少なく、屋根の葺かれ方や後世の転用などの可能性を検討する必要があります。



軒丸瓦

### 天目茶碗 ～中国から伝わったお茶の文化～

お茶を飲む文化は鎌倉時代に、臨済宗の栄西によって日本にもたらされました。お茶を飲むことは禅宗において修行の一つで、現在のように日常的なことではありませんでした。

お茶文化が広まった当初、大陸で作られた貴重な青磁の碗でお茶を飲んでいました。やがて日本で文化が浸透するにしたがい器も変化し、茶の緑色が引き立つ黒い釉薬ゆうやくが基調の天目茶碗が重宝されるようになりました。

安養寺の開山である瘦兀大恵は、京都五山の一つである臨済宗東福寺の第9世であったことから、安養寺でも修行の一つとしてお茶が飲まれたのでしょう。

出土した天目茶碗の中には、高台の裏面に花押が墨書されたものもあります。誰の持ち物かを示すためのサインだったのかもしれませんが。



花押墨書 天目茶碗



天目茶碗



天目茶碗

### 風炉(瓦質土器)・茶釜

風炉ふうろは茶の湯で茶釜ちやかまを掛けて使用しました。瓦質土器の生産は畿内で行われ、当時の伊勢国では生産されていませんでした。そのため、この風炉も持ち込まれたものです。

県内で瓦質風炉がほぼ完全な姿で見つかる例は少なく貴重な資料です。側面には半月状と円形の透穴が開けられ、釜を掛ける縁の部分には菱形の紋様が施されるなど細部まで丁寧に作られています。



瓦質土器 風炉(菱形の紋)



土師器 茶釜



瓦質土器 風炉



瓦質土器 風炉(※別角度)

## 三具足 (香炉・花瓶・燭台)

### ～寺院必須の三道具～

こうろ けびょう しやくい みつぐさく  
香炉・花瓶・燭台は「三具足」と呼ばれ、寺院に欠かせない調度品でした。現在でも寺院に行くと、本堂や方丈などに三つが並べられて置かれています。

安養寺跡から出土した三具足の中でも、青磁香炉は重要な遺物です。

中世の日本では青磁を作ることはできず、大陸から輸入するしかありませんでした。そのため、磁器を入手することは大変難しかったのです。

出土した青磁香炉は中国の元の時代に龍泉窯で生産されたものです。そうした貴重な品が地方の寺院で出土することは、安養寺が室町幕府や伊勢国司北畠氏と強い関係性を持っていたことを物語っています。



青磁 香炉



燭台



花瓶

## 土師器 椀

### ～僧侶の名前入り～

土師器は、日常生活に最も身近な素焼きの土器です。安養寺跡からも最も出土しています。

しかし、中には上質な粘土を使用して丁寧に作られたものもあります。写真の椀4点は、土師器の中でも精良に作られているだけでなく、内面の底の部分に墨で文字が書かれています。それぞれ「浄金」、「道珠」、「了泉」、「芳谷」と読み、恐らく僧侶の名前だと考えられます。

安養寺には貴重な経典が保管され、多くの僧侶が各地から訪れ、修行や写経を行っていたのでしょう。古文書の中には、密教において師が弟子に秘法を伝授したことを示す「印信」と呼ばれる証明書が多数残っています。名前入りの椀は、かつての安養寺が教学の場として栄えたことを示しています。



土師器 椀 (芳谷)

# 造営作業から探る —寺を造った人たち—

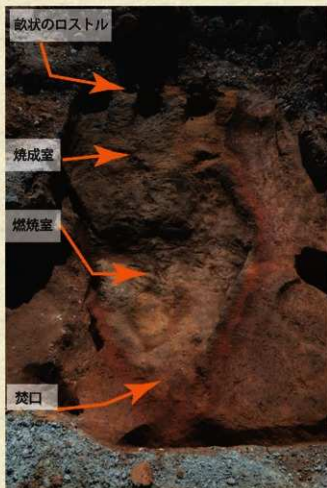
## 瓦窯について

2014年度に実施した発掘調査で、2基の<sup>がまう</sup>瓦窯が確認されました。出土遺物から約500年前の室町時代のもと考えられます。瓦窯の半分以上はすでに削平されていますが、どちらも南北方向に主軸を持っており、焚口は南側にありました。

これらの窯は、ロストル式瓦窯と呼ばれるもので、地面を少し掘りくぼめて粘土や砂などで固めた窯を造り、焚口、燃焼室、焼成室の3つに分けて造っています。すでに壊されていましたが、本来は燃焼室、焼成室の上には覆いがついています。

瓦を詰める焼成室には、名前の由来となっているロストル（畝状の柱）があり、燃焼室から来る炎を効率良く分ける機能を持っており、ロストルの間に瓦を詰めて焼く構造になっています。

どちらの窯も幅約2.4m、長さは約4m以上であったと考えられる小規模なもので、安養寺の全ての瓦を焼いたものではなく、修理などの際に臨時的に造られた窯だった可能性があります。



第7次調査で見つかった瓦窯

## 文字を刻んだ瓦

瓦に文字を刻むことは、現在でも寺院の奉納瓦に見られますが、当時は瓦大工の棟梁などが代表して、棟梁の名前や出身地、瓦を作った年月日などを刻む例が確認されています。安養寺跡からは2例出土しており、ひとつは棟梁の名前と考えられるもので、「橋吉重」と刻まれています。この人は奈良や京都などでも活躍した瓦大工として有名で、法隆寺や東福寺の修繕にも関わっていました。同一人物かどうかは不明ですが、貴重な資料です。もうひとつは、瓦を作った年と考えられる「大永二年」（1522年）が刻まれたものです。ただ、これらの瓦も通常の瓦と同様、屋根に葺かれたと考えられるため、普段目に見えるようなものではなかったと思われます。それでも、安養寺という大寺院に、なにかの記念を残したかったのでしょうか。



「橋吉重」刻書雁振瓦



□ 如此  
橋吉重



「大永二年」刻書雁振瓦



時大永二年  
山城国西郡

## 鑄造土坑について

2013年度の調査では、一辺約2.5m、深さ約1.3mの方形の大きな土坑が見つかりました。

土坑からは鑄型や溶解炉片と思われる鑄造に関連する遺物や銅片が出土しました。鑄型は溶かした金属を注ぎ入れる型で、溶解炉は鑄型へ注ぐ金属を溶かす施設です。土坑の大きさから、梵鐘を鑄造する鑄造土坑と推定され、鐘を鑄造する鑄型を据えたと考えられます。土坑出土の土器から、15世紀頃に作られたと考えられます。

当時、鑄物といえば現在の大阪府堺市周辺の「河内鑄物師」が多くの梵鐘を製作していました。彼らは各地へ出張製作を行っていた事例が確認できます。安養寺でも鑄物師たちが出張し、寺内で梵鐘を製作したのでしょう。



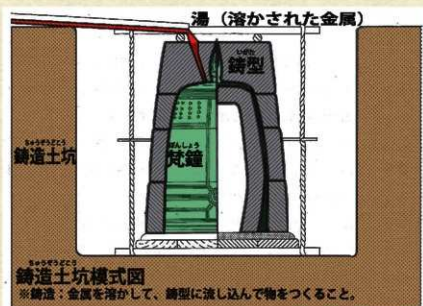
鑄造土坑



鑄造関連遺物



鑄造関連遺物



『京都の古鐘めぐり』より一部改編



鑄造に用いられた銅片が

# 守りつづけられた 安養寺の文化財

## 何度も危機を乗り越えた文化財

16世紀の後半、織田氏の伊勢国侵攻により伊勢国司北畠氏が滅亡します。伝承では北畠氏と関係が強かった安養寺にも、織田方の兵火が及んだといわれています。一時衰退した寺は江戸時代に再興され、貴重な古文書や寺宝は大切に守り伝えられました。しかし、明治時代には廃仏毀釈により、寺は存続の危機を迎えます。安養寺は地元上野の住民による寺の買取によって救われ、その後も地元住民と歴代住職によって貴重な文化財が今日まで残されました。

中でも、「紙本墨書癡兀大恵印信 附 紙本墨書空然印信及び合行図 紙本墨書寂誉印信」と「紙本 墨書安養寺文書」は三重県の有形文化財に指定されています。また、開山癡兀大恵<sup>ちこつだいえ</sup>に關わる品々は「仏通禪師所用法衣並びに什物」7点が明和町の有形文化財に指定されています。安養寺は地方にあって貴重な經典類を多く蔵していたため、教学の場として大いに栄えました。安養寺で書き写された經典の中には大須観音で有名な愛知県名古屋市の真福寺に伝わったものもあります。

## 安養寺大恵禁制

- 安養寺員今以後永々禁制事  
 一塔頭結構莊嚴造營事  
 一現住僧衆、以什人可為定置事  
 一号肉食飲酒喫食其數多々事  
 一以空辛人寺内事  
 一列座樂酒、放逸受用亦面事  
 一方丈寺中、垂髮、影形、或定宿宿事  
 一若狂俗出家、若出家還通、不捨去所任  
 一假形後此來住事  
 右所禁制七箇条中、縦難最小、  
 不可猶犯之類知件  
 延慶二至二月十六日 注之  
 安養寺開山住持大恵(花押)



延慶四年(1311)三月十六日付、開山癡兀大恵によるもので、今後安養寺が守るべき事を全七か条にわたって示しています。第一条に「塔頭結構莊嚴造營事」とあり、塔頭の造営には相応の建築構造と宗教的裝飾性を保つよう求めているほか、現住僧侶の定数などが書かれています。

## 送大福寺常住物注文

- 〔贈裏書〕  
 一安養寺常住物注文正文  
 送大福寺可贈常住物  
 班袈裟 如滿房造  
 坐具 香色  
 檀本 起屋論 釈迦台十帖  
 大日経卷 干舞并大日経七卷 書本  
 不忠論卷 器 書本  
 硯一面  
 香箱 一敵一口皆具  
 首切巻經部 書本  
 五部大乘經部檀本  
 熨斗百巻  
 正和元年十月六日 (大恵 花押)



正和元年(1312)十一月六日付、癡兀大恵による文書です。袈裟や硯・經典など、大福寺に送るべき什物を列記しています。大福寺は安養寺同様に癡兀大恵が開いた寺院で、明和町史では現在の鳥羽市常安寺の前進寺だとしています。



## 町指定文化財と開山癡兀大恵

明和町の有形文化財に指定されている「仏通禪師所用法衣並びに什物」7点は、開山癡兀大恵に関わる品々です。7点の内訳は、「七条袈裟」1領、「法衣」2領、「頭陀袋」1袋、「錫杖頭」1把、「剃刀箱」1個、「剃刀」2口、「鉢盂」5口・「匙」1口・「筋」1対となっています。

安養寺を開いた癡兀大恵(諡号は仏通禪師)は、伊勢国の出身で、比叡山で諸宗の教学を修め、密教に精通していました。東福寺の円爾に対し論戦を挑みましたが、かえって啓発されて門人となったといわれます。安養寺の他に大福寺を開き、応長元年(1311)東福寺第9世に就任しました。

大恵については、頂相と木造の像が残され、いずれも怒気を含んだ厳しい表情のものです。これは、円爾へ論戦を挑んだ逸話など大恵の個性を表現しているものと考えられています。



安養寺開山堂の癡兀大恵像

## 剃刀箱・剃刀



蓋の表には金梨地に金蒔絵で菊紋様が描かれ、裏には小鳥および蝶が舞う様子が描かれています。

## 鉢盂・匙・筋



器の底および下塗は黒漆塗で仕上げは朱漆塗。五口が入子になるようにセットで作られています。同様に仕上げられた匙、筋も合わせて伝えています。

## 錫杖頭



柄が短い手錫杖と呼ばれるもので、楕円形の環に、円形の6個の小環がついています。



## 法衣



## 頭陀袋



瘦兀大惠の示寂に関する墨書「勅謚佛通禪師 正和元年壬子十一月二十二日寅時於安養寺方丈 東二間御坐化」があります。

## 七条袈裟



改装され葉の黒綾及び環の部分のみが残っています。



風風の刺繍

### <小結>

探る編では、今は見ることができない安養寺の姿を探りました。安養寺が非常に広大な敷地を有し、幕府や国司との関わりを持つ強大な勢力であった一端が垣間見られました。しかし、発掘調査による出土資料の量は膨大で今後も整理・分析を行う必要があります。発掘編では発掘調査でわかってきたことを調査回数ごとにご紹介します。

さて、探る編の終わりに地元に伝わる「安養寺の黄金の御所車伝説」をご紹介します。

伝説は菅原道真が伊勢神宮参詣の帰路に安養寺に立寄り、乗ってきた黄金の御所車を引くことに難儀し寺に埋めたというものです。戦前には御所車を見つけようと発掘したものの見つけれなかったそうです。伝説の真偽は不明ですが、歴史上の著名人や財宝と結びついてしまうほど、安養寺が大きな力を持っていたといえます。

安養寺は多くの謎や伝説でこれからも我々を魅了し続けます。



貴重な文化財を伝える現在の安養寺

## <資料編>

### 発掘調査の流れ

#### ①重機掘削



パワーショベルで上にかぶった土を取り除きます。

#### ②掘削



人力でさらに掘削していきます。

#### ③検出



地面をけずり、昔の建物跡などを探していきます。色が濃い部分が痕跡（遺構）です。

#### ④遺構掘削



遺構を掘る時は、土器などを傷つけないよう、丁寧に小道具を使って掘っていきます。

#### ⑤遺物取上げ



土器などが出土した時は、図面や写真を撮影し状況を記録し、慎重に取上げます。

#### ⑥写真撮影



掘削が進むと、調査区全体の写真を撮影します。

#### ⑦実測

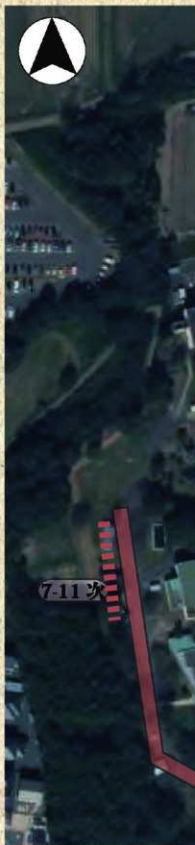


柱穴や溝の跡などの形や大きさを実測し記録します。

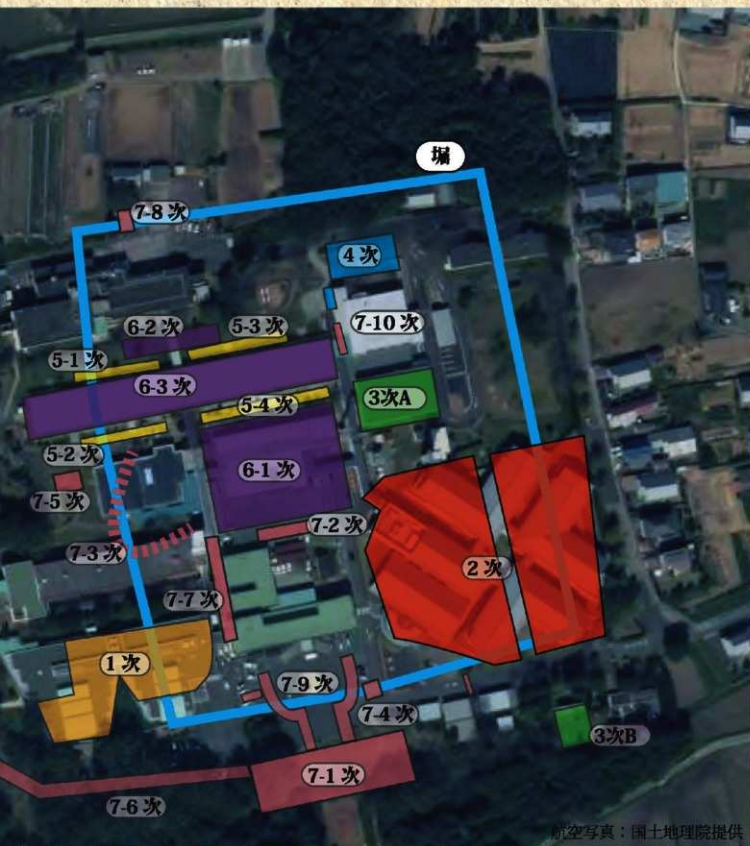
#### ⑧現地説明会



調査で明らかになったことを説明します。



# 安養寺跡発掘調査（第1次～第7次）の位置概略図



航空写真：国土地理院提供

本概要中において調査地点を円滑に把握するため、便宜上「堀」で囲われた部分を「寺域」と表記した。

## 第1次調査

調査期間	1999(平成11)年6月10日～8月9日	
調査面積	1800㎡	
調査原因	病棟の建設	
調査担当者	中野敦夫	
出土遺物量	コンテナ112箱	
主な遺構	奈良時代	竪穴住居、土師器焼成坑、井戸、土坑、ピット
	鎌倉～ 室町時代 (戦国期)	掘立柱建物、井戸、土坑、大溝(堀)、溝、ピット
主な遺物	奈良時代	土師器(甕、皿、杯)、土馬
	鎌倉～ 室町時代 (戦国期)	土師器(鍋、皿、羽釜)、中世陶器(山茶碗、天目茶碗、壺、甕、碗、皿、稷皿、 御皿、小皿、鉢、すり鉢)、磁器(青磁碗、白磁)、瓦質土器(奈良火鉢)、瓦、 埴、石製五輪塔、転用硯、砥石
調査概要	<p>寺域内南西での調査であり、安養寺跡として初めての調査となった。戦時中に陸軍病院が建築されていたため、当初は遺構が存在しない可能性も考えられた。しかし、遺構の保存状態はおおむね良好であることが確認され、安養寺の実態解明の第一歩となった。</p> <p>検出された大溝は、安養寺の周囲を囲む堀と考えられ、幅約5m、深さ約3mである。出土遺物から15世紀ごろに掘削され、安養寺が防御的な性格を持った寺であったことが示唆された。その他にも同時代の掘立柱建物やそれを区画するような溝が確認されている。出土遺物は、南伊勢系土師器、瀬戸・美濃産の陶器、貿易陶磁器、瓦、埴、石製五輪塔などが出土しており、北畠氏祈願所であった安養寺の大規模さが窺える。</p> <p>また、土師器焼成坑を伴う奈良時代の集落が営まれていたことも明らかになり、当地も土器作りに従事した古代有爾郷の範囲に含まれることがわかった。</p>	



第1次調査航空写真(西から)



航空写真(北から)  
左下が寺域中央



調査区全景(西から)



大溝(堀)と寺域内(北から)

## 第2次調査

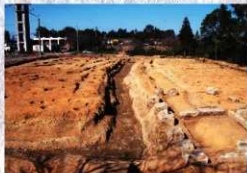
調査期間	2003(平成15)年6月26日～11月23日	
調査面積	4880㎡	
調査原因	特別養護老人ホームの建設	
調査担当者	中野敦夫	
出土遺物量	コンテナ340箱	
主な遺構	奈良時代	堅穴住居、土師器焼成坑、土坑、ピット
	鎌倉～室町時代(戦国期)	掘立柱建物、井戸、土坑、収納坑、堀、区画溝、橋脚、ピット
主な遺物	奈良時代	土師器(甕、皿、杯、甌)
	鎌倉～室町時代(戦国期)	土師器(鍋、皿、台付き碗(墨書)、灯明皿、羽釜、茶釜)、中世陶器(山茶碗、天目茶碗(一部底に花押)、壺、甕、花瓶、香炉、碗、皿、稜皿、卸皿、小皿、鉢、すり鉢)、磁器(青磁碗、青磁香炉、白磁)、瓦質土器(風炉、硯)、瓦、刻書瓦、埴、石臼、石製五輪塔、石硯(刻書絵画)、転用硯、砥石、漆塗り草札、青銅製品(六器、鈴、蓋、鐘)
調査概要	<p>寺域内南東での調査であり、第1次調査で確認された大溝の延長が確認されたことで、大溝が寺域を囲う堀であることが確定した。堀は寺域全体を囲むもので一辺約170mと考えられ、総延長は700mに及ぶ大規模なものであることが明らかとなった。また、堀の外側にも同時代の遺構が密集して広がっていることが確認された。</p> <p>堀をはじめとして15～16世紀の遺構が多数を占め、石組井戸や掘立柱建物、区画溝などが多く確認された。堀南辺の一部では、橋脚跡が確認されており、幅約4mの橋がかかっていたと考えられ、堀内には橋とつながる導線上に並行する溝や柱穴が確認されており、廊下状の施設があったことも想定される。地下式の倉である収納坑と考えられる方形の土坑が確認されており、寺院内の建物は掘立柱建物だけではなく、収納坑を持つ建物が存在したことがわかった。</p> <p>調査区各所からは、仏教祭祀に使われたと考えられる青銅製品や、建物の名前や僧侶の名前・花押が墨書された土器、瓦工人「橋 吉重」の名前が刻書された瓦、龍泉窟産の青磁香炉、馬の絵が線刻された硯などが出土しており、安養寺に関する多くの情報が得られた調査となった。特に、年号が記された遺物として、「大永二年」(1522年)や「庚申 愛染堂」(1520年と推定)があり、安養寺の実年代が改めて確認された。</p> <p>また、堀の底からは漆塗りの草札が出土しており、実際に戦闘が行われた可能性も考えられた。</p>	



西半全景(北から)



石組井戸(南から)



直角に曲がる堀(南から)



掘立柱建物(西から)

### 第3次調査 A・B地区

調査期間	2004(平成16)年4月5日～5月27日	
調査面積	700㎡	
調査原因	給食棟建設および浄化槽の設置	
調査担当者	中野敦夫	
出土遺物量	コンテナ50箱	
主な遺構	奈良時代	土坑、溝、ピット
	鎌倉～室町時代(戦国期)	掘立柱建物、井戸、土坑、収納坑、溝、区画溝、ピット
主な遺物	奈良時代	土師器(甕、皿、杯、瓶)、須恵器(杯)
	鎌倉～室町時代(戦国期)	土師器(鍋、皿、羽釜、茶釜)、中世陶器(山茶碗、天目茶碗(墨書)、壺、甕、香炉、碗、皿、稜皿、卸皿、小皿、鉢、すり鉢)、磁器(青磁碗、白磁碗)、瓦質土器(風炉)、瓦、鬼瓦、塼、転用碗、砥石、青銅製品(碗)、鉄製品(刀子)、金属滓
調査概要	<p>A地区は寺域内中央付近の調査であるため、伽藍配置の解明が期待されたが、明確に伽藍配置等を推定できるものは確認できなかった。ただ、天目茶碗の底に「開」と墨書されたものがあり、現在の安養寺にも存在する開山堂が15世紀ごろに存在した可能性が考えられた。</p> <p>掘立柱建物と収納坑を持つ建物は確認されたが、寺院に伴う基壇などの遺構は確認できなかった。また、当調査では金風禅などの鑄造関連遺物が出土し、寺域内で鑄造を行っていた可能性が考えられた。</p> <p>B地区は寺域外南東での調査であり、堀から南に約50m離れた場所である。南北を主軸とした区画溝が多く確認され、寺域外南側にも密度が少ないながら遺構が存在していることがわかり、寺と関連した施設が丘陵の大部分に広がっている可能性が示唆された。</p>	



A地区全景(南から)



収納坑(北から)



ピット群(北から)



B地区全景(北西から)

#### 第4次調査

調査期間	2012(平成24)年1月23日～3月26日	
調査面積	498㎡	
調査原因	病院建設	
調査担当者	乾哲也、中野敬夫	
出土遺物量	コンテナ23箱	
主な遺構	奈良時代	掘立柱建物、土師器焼成坑、土坑、ピット
	鎌倉～室町時代(戦国期)	土坑、溝、区画溝、ピット
主な遺物	奈良時代	土師器(甕、皿、杯、甌)、須恵器
	鎌倉～室町時代(戦国期)	土師器(鍋、皿、羽釜)、中世陶器(山茶碗、天目茶碗、壺、甕、香炉、皿)、磁器(青磁碗)、瓦、埴
調査概要	<p>寺域内北東部での調査であり、多くの成果が期待されたが、明確な建物跡などは確認されなかった。堀と並行する東西方向の区画溝が確認され、調査区内で直角に曲がっていることが確認されたが、周辺に関連遺構は確認されなかった。</p> <p>全体に遺構密度・遺物量が寺域内南側と比べると著しく少なく、陶器類も少量であった。</p> <p>そのため、周辺調査が進展しないと不明な部分が多いものの、寺域内であっても建物が存在しない空地のようなものが存在していた可能性も考えられる。</p> <p>また、奈良時代の遺構は全体に多く確認することができ、これまでの調査でも多く確認されていることから、安養寺の位置する丘陵全体が奈良時代の生産集落で占められていた可能性も考えられた。</p>	



全景（東から）



区画溝（南西から）



奈良時代の掘立柱建物（西から）



土師器焼成坑（東から）

### 第5-1次調査

調査期間	2012(平成24)年6月4日～10月26日	
調査面積	140㎡	
調査原因	病院建設	
調査担当者	乾哲也、中野敦夫	
出土遺物量	コンテナ8箱	
主な遺構	奈良時代	土坑、ピット
	鎌倉～室町時代(戦国期)	土坑、堀、溝、ピット
主な遺物	奈良時代	土師器(甕、皿、杯、瓶)、須恵器
	鎌倉～室町時代(戦国期)	土師器(鍋、皿)、中世陶器(山茶碗)、瓦、埴
調査概要	<p>寺域内西部での調査であるが、小規模なトレンチ状の調査であったため、明確な建物跡などは確認されなかった。西側の堀と、それに軸を合わせる溝が多く確認され、堀の規模を再確認することができた。ただ、全体に遺物量が少なく、陶器類もほとんど出土しなかった。</p> <p>そのため、寺の空閑地として活用されていた可能性も考えられる。</p>	

### 第5-2次調査

調査期間	2012(平成24)年6月4日～10月26日	
調査面積	200㎡	
調査原因	病院建設	
調査担当者	乾哲也、中野敦夫	
出土遺物量	コンテナ7箱	
主な遺構	奈良時代	土坑、ピット
	鎌倉～室町時代(戦国期)	土坑、堀、溝、ピット
主な遺物	奈良時代	土師器(甕、皿、杯、瓶)、須恵器(甕)、土馬
	鎌倉～室町時代(戦国期)	土師器(鍋、皿、羽釜)、中世陶器(山茶碗、壺、甕、碗)、瓦、埴
調査概要	<p>寺域内西部での調査であるが、小規模なトレンチ状の調査であったため、明確な建物跡などは確認されなかった。西側の堀と、それに軸を合わせる溝が確認され、堀の規模を再確認することができた。調査区東側では、東西方向の溝も確認され、区画性のある溝である可能性が考えられた。ただ、全体に遺物量が少なく、陶器類もほとんど出土しなかった。</p> <p>そのため、寺の空閑地として活用されていた可能性も考えられる。</p>	



第5-1次調査全景(東から)



第5-2次調査全景(西から)



### 第5-3次調査

調査期間	2012(平成24)年6月4日～10月26日	
調査面積	135.9㎡	
調査原因	病院建設	
調査担当者	中野敦夫、乾哲也	
出土遺物量	コンテナ10箱	
主な遺構	奈良時代	竪穴住居、掘立柱建物、土師器焼成坑、土坑、ピット
	鎌倉～室町時代(戦国期)	土坑、溝、ピット
主な遺物	奈良時代	土師器(甕、皿、杯、甌)、須恵器(甕)、土馬
	鎌倉～室町時代(戦国期)	土師器(鍋、皿、羽釜、焙烙)、中世陶器(山茶碗、甕)、瓦、埴
調査概要	<p>寺域中央部に近い調査であったが、小規模なトレンチ状の調査であり、中世の遺構・遺物はともに少なかった。</p> <p>ただ、奈良時代の遺構が多く確認された。一部では土師器焼成坑を同じ場所に3回造り変えをしていることが確認され、土師器焼成坑の性格を検討できる良い事例となった。</p>	

### 第5-4次調査

調査期間	2012(平成24)年6月4日～10月26日	
調査面積	98.5㎡	
調査原因	病院建設	
調査担当者	乾哲也、中野敦夫	
出土遺物量	コンテナ5箱	
主な遺構	奈良時代	土坑、ピット
	鎌倉～室町時代(戦国期)	土坑、溝、ピット
主な遺物	奈良時代	土師器(甕、皿、杯、甌)
	鎌倉～室町時代(戦国期)	土師器(鍋、皿、羽釜、焙烙)、中世陶器(山茶碗、天目茶碗、碗、皿)、瓦質土器(風炉)、瓦、埴、石硯、砥石、金属滓
調査概要	<p>寺域中央部に近い場所での調査ではあったが、トレンチ状の調査であったため、明確な建物跡などは確認されなかった。南北方向に軸を持つ溝が確認され、全体に遺物量は少なかったが、陶器類や石硯が出土し、周辺に寺院建物が存在していたことをうかがわせる。また、金属滓が出土していることから、周辺に鋳造に関連する施設があった可能性がある。</p>	



第5-3次調査全景(南西から)



第5-3次調査土師器焼成坑  
(北西から)



第5-4次調査全景(東から)

## 第6-1次調査

調査期間	2013(平成25)年5月15日～2014(平成26)年1月29日	
調査面積	2741.75㎡	
調査原因	病院建設	
調査担当者	味噌井拓志、乾哲也、中野敦夫	
出土遺物量	コンテナ220箱	
主な遺構	奈良～平安時代	竪穴住居、掘立柱建物、土師器焼成坑、土坑、ピット
	鎌倉～室町時代(戦国期)	掘立柱建物、井戸、土坑、鋳造土坑、収納坑、区画溝、溝、ピット
主な遺物	奈良～平安時代	土師器(甕、皿、杯、甌)、須恵器(杯、壺、埴瓶、甕)、緑釉陶器(碗)
	鎌倉～室町時代(戦国期)	土師器(鍋、皿、灯明皿、羽釜、茶釜、焙烙、十能形)、中世陶器(山茶碗(一部墨書)、山皿、天目茶碗(一部底に刻書)、壺、甕、香炉、水滴、碗、皿、鉢、すり鉢)、磁器(青磁碗、白磁香炉)、瓦質土器(風炉、瓦、埴、石製五輪塔、転用硯、砥石、金属滓、鋳型状土製品、青銅製品(梵鐘)、鉄製品(釘)
調査概要	<p>寺域内中央での調査であり、伽藍配置などの解明が期待されたが、陸軍病院建設時の工事によって大きく攪乱されており、遺構面が残っている部分が少なかった。それでも多くの遺構・遺物が確認され、安養寺の解明に大きな意味のある調査となった。</p> <p>遺構時期は大きく分けて奈良～平安時代前期、鎌倉時代後半、室町時代で、これまであまりまとまりがなかった安養寺創建期(鎌倉時代後半)の遺構・遺物も多く確認された。</p> <p>平安時代のピットからは、近江産とみられる緑釉陶器の碗が出土し、安養寺跡の調査では初確認となった。周辺に平安時代の中心施設があった可能性が考えられる。</p> <p>創建期と考えられる遺構は、南北方向の区画溝で、堀の掘削以前にも寺域内を区画していた可能性がある。ほか、収納坑を持つ建物跡からは、袴腰形香炉や水滴などが出土しており、初期段階の寺院関連遺構と考えられる。ほか出土遺物としては、山茶碗の碗部外面に、「上野内」の墨書が確認されており、山茶碗の転用硯とともに初期の寺院関連遺物とも考えられる。</p> <p>鋳造関連遺構としては、大型土坑や溶解炉跡などが確認され、鋳型状の土製品も確認された。周辺からは多くの金属滓や青銅梵鐘片が確認され、梵鐘片は再溶融の原料とされたよう、溶けかかっている状態であった。</p> <p>室町時代(戦国期)の16世紀ごろの遺構で特筆すべきものとして方形区画溝(延長約40m)があり、ここには石製五輪塔や埴、瓦、礫が大量に投棄された状態で確認された。周辺で伽藍遺構などは確認されなかったが、近くに寺院建物が存在したと考えられる。また、当該期が安養寺の廃絶期と考えられ、その状況から寺が破却された可能性も考えられる。</p>	



全景(北東から)



方形区画溝(東から)



収納坑(東から)



鋳造関連大型土坑(北から)

### 第6-2次調査

調査期間	2013(平成25)年10月15日～11月27日	
調査面積	203.65㎡	
調査原因	病院建設	
調査担当者	味噌井拓志、乾哲也	
出土遺物量	コンテナ10箱	
主な遺構	奈良～ 平安時代	土師器焼成坑、土坑、ピット
	鎌倉～ 室町時代 (戦国期)	石組み遺構、掘立柱建物、井戸、土坑、区画溝、ピット
主な遺物	奈良～ 平安時代	土師器(甕、皿、杯、甌)
	鎌倉～ 室町時代 (戦国期)	土師器(鍋、皿、羽釜)、中世陶器(山茶碗、天目茶碗、甕、碗、鉢、すり鉢)、磁器(青磁碗)、瓦質土器(風炉、瓦、埴、石製五輪塔、転用硯、砥石、鉄製品(釘))
調査概要	<p>寺域内北西部にあたる調査で、安養寺跡では初めてとなる石組み遺構が確認された。平面形は方形になると想定され、寺院建物の基壇となる可能性が考えられたが、大半は調査区外のため詳細は不明である。遺物はほとんど出土しなかったが、15世紀以降と思われる。また、石組みの一部には石製五輪塔の一部が転用されていた。</p> <p>石組み遺構に隣接して直角に曲がる区画溝が確認されたが、両者の主軸が異なっており、関連性はないと考えられる。出土遺物からも、区画溝は堀の掘削以前の14世紀ごろと考えられ、掘削前に寺域内に区画性があったことが考えられる。</p>	

### 第6-3次調査

調査期間	2013(平成25)年5月15日～2014(平成26)年1月29日	
調査面積	1417.5㎡	
調査原因	病院建設	
調査担当者	味噌井拓志、乾哲也、中野敦夫	
出土遺物量	コンテナ30箱	
主な遺構	奈良～ 平安時代	竪穴住居、土師器焼成坑、井戸、土坑、ピット
	鎌倉～ 室町時代 (戦国期)	掘立柱建物、井戸、土坑、堀、区画溝、ピット
主な遺物	奈良～ 平安時代	土師器(甕、皿、杯、甌)、須恵器、灰軸陶器(高杯)
	鎌倉～ 室町時代 (戦国期)	土師器(鍋、皿、大型鉢、羽釜)、中世陶器(山茶碗、天目茶碗、甕、碗、皿、鉢)、瓦質土器(風炉、硯)、瓦、埴、転用硯、砥石
調査概要	<p>寺域内北～北西部の調査であるが、現行病院の基礎を残したままで、その隙間を調査する形となったため、小規模な調査を連続して行った。</p> <p>調査区西端で確認した堀は、寺域内を四周するもので、幅約4m、深さ約1.8mである。出土遺物は多くなかったが、寺域内北西部では初確認であった。そのほか、主に南北方向の区画溝を確認した。</p> <p>平安時代の遺構も確認され、遺跡内各所に当該期の集落が存在することがわかった。</p>	



第6-2次調査石組遺構  
(南東から)



第6-2次調査全景(西から)



第6-3次調査堀(北から)

## 第7-1次調査

調査期間	2014(平成26)年7月18日～9月11日	
調査面積	1652㎡	
調査原因	病院建設	
調査担当者	乾哲也、味噌井拓志	
出土遺物量	コンテナ35箱	
主な遺構	奈良～平安時代	掘立柱建物、土師器焼成坑、土坑、溝、ピット
	鎌倉～室町時代(戦国期)	掘立柱建物、土坑、区画溝、ピット
主な遺物	奈良～平安時代	土師器(甕、鉢、皿、椀、杯、高杯、瓶、製塩土器)、須恵器(杯、高杯、円面硯)
	鎌倉～室町時代(戦国期)	土師器(鍋、皿、十能形、羽釜、茶釜、焙烙)、中世陶器(天目茶碗、甕、椀、皿、稜皿、小皿、鉢、すり鉢)、磁器(青磁椀)、瓦質土器(風炉)、瓦、埴、石臼、砥石、輪、金属滓
調査概要	<p>寺域外南部での調査であり、多くの遺構を確認したが、一部は工事が遺構面に達しなかったため、遺構検出のみに留めた。</p> <p>寺域外南部にも多くの遺構が存在することが確認された。主に室町時代(戦国期)であるが、調査区南端では遺構・遺物ともに減少し、南側に広がる仲畑遺跡の発掘調査では、当該期の遺構などは確認されていないため、安養寺の南限にあたる地点と考えられる。</p> <p>また、調査区北端では平面が隅丸方形となる土坑が2基確認され、両者は径30cmほどの暗渠状遺構で連結されていた。暗渠状遺構は、約2mの長さで直線になっているため、木や竹などを使った送風管と想定される。土坑の周囲には被熱痕があり、輪や金属滓も確認されたため、金属生産に関わる遺構と考えられる。</p> <p>出土遺物では、寺域内中央部と同様に陶器類も多く確認されたが、土師器鍋などの日常雑器が多く確認された。</p> <p>奈良～平安時代前期の掘立柱建物や土坑も確認され、円面硯が出土していることから、集落の中心施設が周辺にあった可能性も考えられる。</p>	



全景(南から)



全景(南東から)



金属生産関連遺構(北西から)



古代の掘立柱建物(北から)

### 第7-4次調査

調査期間	2014(平成26)年9月4日～10月10日	
調査面積	61㎡	
調査原因	病院建設	
調査担当者	乾哲也、味噌井拓志	
出土遺物量	コンテナ1箱	
主な遺構	奈良時代	ピット
	鎌倉～室町時代(戦国期)	堀、陸橋、ピット
主な遺物	奈良時代	土師器
	鎌倉～室町時代(戦国期)	土師器(銅)、埴
調査概要	<p>寺域内南端での調査であり、堀南辺の中心部分にあたるため、橋や門状の遺構が検出されることが期待された。</p> <p>調査の結果、堀には幅約2.5mの陸橋が存在したことが明らかになったが、周辺に遺構はほとんどなく、門などの遺構も確認できなかった。堀からの出入り口が確認されたのは、第2次調査の木橋とこの陸橋のみであるが、どちらも寺の入口としては非常に小さいものである。</p> <p>そのため、少なくとも堀を掘削した15世紀代の安養寺では、南を正面とはしていなかった可能性が出てきた。また、古代伊勢道は寺の北側であるため、北側に門などの施設が想定されることとなった。</p>	

### 第7-8次調査

調査期間	2014(平成26)年9月30日～11月14日	
調査面積	33.92㎡	
調査原因	病院建設	
調査担当者	乾哲也	
出土遺物量	コンテナ1箱	
主な遺構	奈良時代	ピット
	鎌倉～室町時代(戦国期)	土坑、堀、ピット
主な遺物	奈良時代	土師器
	鎌倉～室町時代(戦国期)	土師器
調査概要	<p>寺域内北西端での調査であり、堀北辺が確認されることが期待された。</p> <p>堀はこれまで確認されている南側と比べて浅く規模が小さかったが、存在が初めて確認され、想定を裏付ける調査となった。</p> <p>ただ、ほかにはほとんど遺構は確認されず、遺物量も少なかった。これまでの寺域内北側の調査でも同様に遺構・遺物量が減少していることが確認されており、寺域内空地の存在や、生活感の意図的な排除があったことなどが想定される。</p>	



第7-4次調査 堀と陸橋(西から)



第7-8次調査全景(北東から)

## 第7-9次調査

調査期間	2014(平成26)年10月14日～11月14日	
調査面積	56.2㎡	
調査原因	病院建設	
調査担当者	乾哲也	
出土遺物量	コンテナ3箱	
主な遺構	奈良時代	土坑、ピット
	鎌倉～室町時代(戦国期)	掘立柱建物、瓦窯、土坑、堀、ピット
主な遺物	奈良時代	土師器(甕、皿、杯、高杯、甌)、須恵器
	鎌倉～室町時代(戦国期)	土師器(鍋、皿)、中世陶器(甕)、瓦、埴、不明土製品
調査概要	<p>寺城内南西での調査であり、堀南辺も確認した。</p> <p>また調査区の西側で、ロストル式の瓦窯を2基確認した。すでに削平されている部分もあったが、主軸を南北に向けて並列している状況が確認された。どちらも長さ約2.2m、幅約1.2mの小規模なものである。出土遺物はほとんどなく、時期が想定しづらいが周辺の遺構から判断して15～16世紀ごろと考えられる。</p> <p>よって、堀に囲まれた寺城内で瓦生産が行われていたことが明らかとなった。ただ、その規模から判断して、多くの瓦を供給するものではなく、堂の修繕時など、臨時的に営まれた窯であった可能性が考えられる。</p>	

## その他の調査(第7-2、7-3、7-5、7-6、7-7、7-10、7-11次調査)

調査期間	2014(平成26)年8月21日～2015(平成27)年3月31日	
調査面積	992.88㎡	
調査原因	病院建設	
調査担当者	乾哲也、味噌井拓志	
出土遺物量	コンテナ10箱	
主な遺構	奈良時代	土師器焼成坑、土坑、ピット
	鎌倉～室町時代(戦国期)	掘立柱建物、土坑、ピット
主な遺物	奈良時代	土師器(甕、皿、杯、高杯、甌)
	鎌倉～室町時代(戦国期)	土師器(鍋、皿、羽釜)、中世陶器(山茶碗、天目茶碗、甕、すり鉢)、埴
調査概要	<p>遺跡内各所で小規模な調査や立会いを行った。</p> <p>7-2次調査は寺城内中央の調査であり、中世の遺構を若干確認した。</p> <p>7-3次調査は寺城内東端の調査であったが、近代の攪乱が激しかったため、主に立会いの調査を行った。</p> <p>7-5次調査は寺城外西側の調査であり、中世前半の遺構を若干確認した。</p> <p>7-6次調査は寺城外南西部の調査で、奈良時代・中世の遺構を若干確認した。</p> <p>7-7次調査は寺城内南西の調査であったが、近代の攪乱が激しかったため、主に立会いの調査を行った。</p> <p>7-10次調査は寺城内北東の調査で、主に奈良時代の遺構を確認した。</p> <p>7-11次調査は寺城外西部の調査であったが、諸事情のため、断面調査のみを実施し、奈良時代の遺構を若干確認した。</p>	



第7-9次調査  
瓦窯全景（東から）



第7-9次調査  
瓦窯検出状況（北西から）



第7-9次調査  
瓦窯断ち割り状況（南から）



第7-2次調査全景（西から）



第7-5次調査全景（南から）



第7-6次調査西半（南から）

## <さらなる成果をまとめるために>

### 整理作業

発掘調査で確認された様々な成果は、整理作業によって完成され、報告書を書くことで完結します。ただ、安養寺ほどの大規模遺跡では、その整理は簡単なものではありません。

しかし、整理作業で土器や建物の年代・その類別などを調べることによって、発掘調査でもわからなかったことが明らかになることがあります。今回の概要はその端緒であり、さらなる成果をまとめるために、これからも整理作業は続いています。

南勢屈指の大寺院と呼ばれた安養寺のさらなる調査成果にご期待ください。



### 洗浄

土器に付着した土をブラシでおとします。土器の文様などが消えてしまわないよう、丁寧に洗います。

### 接合・復元

ばらばらに割れてしまっている土器の破片を接着剤でつなぎ合わせていきます。欠けてしまっている部分は石こうで埋めて復元します。



### 実測

土器などの出土遺物の形や大きさなどを正確に計測し、図面に描きます。どのように作られたのか調整方法なども観察します。



安養寺跡出土 石製硯に線刻された馬

## 安養寺跡を探る

### —安養寺跡発掘調査概要—

平成28年3月31日

編集・発行：三重県多気郡明和町

印刷：光出版印刷株式会社

- 1 この冊子は、社会福祉法人恩賜財団済生会明和病院の改築等に伴い、明和町が発起請負した成果の概要です。
- 2 発掘調査や冊子作成にあたっては、社会福祉法人恩賜財団済生会明和病院の全面的な協力を得ました。
- 3 発掘調査の成果については現在も整理中のため、本冊子の内容も今後変更されることがあります。
- 4 この冊子は、明和町斎宮跡・文化観光課が編集し、乾哲也・味澤井拓志が分担して執筆しました。